（１）人の悪口を言わないこと
（２）人を悪く思わないこと
（３）人に悪く思われないこと
しかし、これらは言うにやさしく、なかなか実行できるものではない。
（１）の「人の悪口を言わないこと」、はなかなか難しい。我々は聖人君子ではない。人の悪口を話題にすれば話が弾む。清廉潔白な人と話しても面白みがない。悪口をいうのは自分がその人より優位に立ちたいからである。人を褒めるということはその人より劣った人間だと見なすことになる。我々は人の失敗を期待しているのかも知れない。しかし、日常の些細な悪口は酒の肴で、それ以上でも以下でもない。「ガス抜き」と思えばよい。人の悪口を言う事はお互いのコミュニケーションを高め、人間関係をよくする。そのため、たわいもない悪口は許されると思う。しかし、「人を落としいれる」ような悪口は慎むべきである。
（２）「人を悪く思わないこと」これも難しい。先輩は「人と付き合う場合、その人の良いところを見て付き合え」とよくいわれた。私もそのように出来るだけ心がけるようにしている。しかし、人の良いところは沢山あるが、あまり印象には残らない。人の悪いところは非常に些細なことでも、よく目に付く、日本人はもともと「性善説」である。よいことをして当たり前である。人間の脳は防護反応により、ネガティブイメージは克明に印象づけられ、脳にプログラミングされる。昔は人の悪口を言わない人は人格者と言われていた。特に「へそから下の話し」はその人の甲斐性であるのでしないことになっていた。ところが、最近は「へそから下」の話であろうとあらゆる私生活の話が話題になる。特に、マスメディアは有名人に対して個人的な悪口を書き立てる。一般の人達もそれを望んでいる。これは世の中が熟成し、将来に対しての希望が無くなってきたのかもしれない。そこで、人の悪口を言って喜んでいるようにも見える。しかし、できるだけ「人のよいところ」を見るように心がけるべきである。
（３）の「人に悪く思われないこと」は受身であり、自分ではどうする事も出来ない。しかし、心の度量を大きくし、約束を守り、正義感を持ち、礼儀正しく、謙虚かつ率直に誰からでも学ぶ努力をすれば人より信頼され、人から悪く思われない人間になることはできる。
　しかし、人の評価は時代により、社会環境により変わって行く。正義、絶対、真実というものは時代によって異なる。昔は良き人と思われていても、今は悪い人と評価される場合もある。また、逆の場合もある。

４． コミュニケーション

豊かな人間性が確立されても放射線管理は達成できるものではない。豊かな人間性は放射線管理者に備わっていなければならない要素である。しかし、放射線管理は放射線作業者の安全と一般住民に安心を与えることである。そこで、放射線作業者及び一般住民とのコミュニケーションが重要になってくる。

コミュニケーション（Communication）とは「意思疎通」とも訳されているが、複数の人間が感情、意思、情報、思考などを、言語や身振りなどを伝達の手段として相手に意思を伝えるまたは伝え合うことである。しかし、これら以外にも心の通い合いという意味にでも使われている。例えば「親子のコミュニケーションをとる」とは親子が互いに理解し合うということである、「夫婦のコミュニケーションがない」は夫婦の気持ちが通い合っていないという意味である。

これまで、日本ではコミュニケーションという言葉がなかったというより必要としないほど「伝わりあって」いた。夫婦のコミュニケーションは空気のようなもので、会話がなくても気持ちが通じあっていたものである。人間関係は欧米では対立関係であるのに対して日本では自分を殺して「和」をもとめた。そのため人と人の距離を埋めるための手段であるコミュニケーションが欧米では必要であったが、「気配り」とか「以心伝心」「あうんの呼吸」をモットー（Motto）とする日本人にはコミュニケーションというものは必要でなかった。近年、日本人も欧米化思考となりコミュニケーションが必要になってきたが、「和」の精神は今なお残っている。しかし、最近になり欧米化思考の反動として「和」の精神が復活し始めてきた。これからは日本の「和」の精神を取り入れたコミュニケーションが必要である。人間以外の動物にもコミュニケーションはある、しかし人間みたいにこまやかな関係を作ることは出来ない。コミュニケーションの内容も時代とともに変化しつつある。直接話し会うというコミュニケーション能力は衰退しつつあり、新しいコミュニケーションとして携帯電話やパソコンによるメール等によるものが普及してきている。

５． 人間関係とコミュニケーション

人間関係のコミュニケーションは言語や身振り、姿勢、表情、視線、服装、髪型、声のトーンや音質などを媒介にして 0.6 秒で決まる。そのうち視覚によるものが 70～80%を占める。アメリカの心理学者の研究によればコミュニケーションの役割は顔の表情は 55%、声の大きさ、テンポは 38%、話す内容

は７％であるといわれている。

医者が患者を診る場合、まず患者が診察室に入ってくる態度をみる。そして、患者を目の前に座らせて世間話をする。話しの内容は患者に合わせた内容にする。そのとき医者は患者の全身（顔色、皮膚の状態、身振り、話しぶりなど）を見ている。そして、患者の顔をみながら何処が悪いのですか、と話しかける。これで診断が全て終わっている。その後、患者の病状などを聞きながら、脈を診たり、お腹を押さえたり、血圧を測ったりする。このように患者の総合的な状況をみて診断を行う。しかし、最近のお医者さんは検査結果を重要視されるようになってきた。

放射線管理者も作業環境、放射線作業者の仕草、癖等を調査、観察しながら管理を行うべきである。人には「無くて七癖、あって四十八癖」といわれるくらいで、癖のないような人でも七つぐらいの癖を持っている。また、原子力周辺の住民に対しては、その時の社会の「空気」を読みながら、不特定多数の住民側にたった対応が必要となる。放射線管理も人を見て管理を行う必要がある。

６．　言語によるコミュニケーション

言語によるコミュニケーションは一般的には正確で、お互いに「わかち合え」、共感する事も出来る。しかし、同じ言葉を複数の人に投げかけても、人によって必ずしも同じ受け止め方はしない。受け止める相手の人間性によって変わってくる。相手の人間性も考慮してコミュニケーションを行う必要がある。

コミュニケーションに用いる言語には単なる文の羅列ではなく、物事を順序立て、道筋を立てて話す事が大切である。自己の考えを論理的に明確に、相手に表現する能力、冷静に人の話を聞けるような能力が必要である。しかし、状況に応じて適切な表現を用いる場合もある。

自分の思いを率直に伝えながら、相手の気持ちにも気を配り、人間関係を損なうことなく目的を達成するためのテクニックにはどのような対処するのがよいだろうか。

（１）相手の意見を受け入れ、自分の意見を押し殺す。
（２）自分の意見を主張し、相手の意見を否定する。
（３）相手の意見を無視する。
（４）相手の意見を尊重し、自分の意見も主張する。　　等

放射線管理者が放射線作業者とコミュニケーションを行う場合には（2）の自分の意見を主張し、相手の意見を否定することになりがちであるが（4）の相手の意見を尊重し、自分の意見も主張するようにしなければならない。また、原子力施設周辺の一般住民とコミュニケーションをとる場合には（1）の相手の意見を受け入れ、自分の意見を押し殺し勝ちであるが、（4）の相手の意見を尊重し、自分の意見も主張するようにしなければならない。これが放射線管理者として必要なことである。
放射線管理者の真髄は「人の心がつかめるかどうか」「相手の立場で考えられるかどうか」である。

7． 非言語によるコミュニケーション

「目は口ほどにものを言う」という諺があるように、目や視線によるコミュニケーションは非常に重要な役割を果たす。目や視線にはその人の心理状態や相手に対する感情がよく現れる。ウインクで愛情表現も出来る。

昔の日本人は相手と目をあわせないのは、丁寧さや尊敬を意味する事であった。表情には表さないようにする事が大切であった。欧米人は相手の目をしっかりと見ない人は、不誠実、不正直、ごまかしがあるのではないかと感じる。悲喜こもごもを表情として大げさに表す。このように日本と欧米とは根本的考え方が違う。しかし、日本人は日本人本来の「和」と欧米の「対立」を上手に取り入れている。例えばお嫁さんをもらいに行く時には日本式に目を伏せて小声で「お嬢さんと結婚させてください」とお願いする。直接相手の目を見ない。それが相手を尊敬している事になる。しかし、会社では相手の目をみて発言しなければならない。目を逸らすと自信がないように思われる。日本人は相反する人間関係を、相手及び場所、状況によって使い分けている。

放射線管理の現場はビジネスである。相手の目を見ながらコミュニケーションを行うべきである。そして、目つきは常にやさしく、表情の和やかでなければならない。心は目の視線及び身体全体の表情に表れる。目は正直である。相手を不愉快に思うときには視線および表情に表れる。そのため、心は常におだやかでなければならない。
人と話す時、身振り手振り（ジェスチャー）しながら話すと話に力が入り、熱ぽく話せる。聞き手も聴覚だけではなく視覚によっても感ずるので、コミュニケーションがよくなる。特に注意するような時には指差しジェスチャーを使用することが多い。
放射線管理者が作業する場所は放射線以外に騒音の場所もあり、音声が通じない鉛ガラスの向こう側に作業者がいる場合もある。そのような場合にはジ

ェスチャーがコミュニケーションの有力な手段となる。

８．まとめ

我々人間は防護本能により群れを作る。そして、群れを維持するために、日本人は互いに思いやり、協調する「和」の精神で集団を維持してきたが、欧米ではお互いに「対立」しながらコミュニケーションを図り集団を維持している。これからの放射線管理者は欧米化思想のコミュニケーションの中に日本的考えの「和」「思いやりの心」を取り入れたコミュニケーションが必要となる。

放射線管理は人間を対象にした職業である。そのため、放射線管理を上手に行うには欧米の「対立」の思想に日本の和の精神を取り入れた人間関係が必要となる。これは日本人が最も得意とするところであるので、人の安全と安心を中心にした新しい放射線管理学を構築していかなければならない。

（ESI-NEWS Vol.28 No.5 2010 より転載）